疎

開

疎開寮の庭先で

〈「杉並区教育史 下巻」より〉

疎開の思い出

●世田谷区太子堂四丁目
稲田　明子
（昭和一二年生まれ）

満員の鈴なり列車に乗って行ったという記憶もない私です。国民学校一年の終わりから、二年の初めにかけての六か月位の間、山梨は甲府の隣、「竜王駅」で下車、徒歩一時間程の「下高砂」という村でした。笛吹川が流れる近くの静かな所でした。最初は祖母、姉、私と三人で疎開し、途中から母と兄も来ました。今思えば、淋しいとか悲しいとかの感情があったかどうか分かりません。疎開第一夜は、うとうとすると何やら体中がムズムズかゆくって、とても眠るわけにはいかなかったのです。

まさか、蚤（のみ）や虱（しらみ）に悩まされるなんて考えてもいませんでした。次の日蚤がピョンピョンとぶのも、虱が髪の毛の間を這い廻るのも、しっかりとこの目で見たのは初めてです。そしてこれは、東京に帰って、ＤＤＴを頭からかけられるまで、続きました。床の落ちそうな電気のない便所も、お風呂も、外庭にあったし夜はとても怖くてイヤでした。

学校は、部落ごとの集団登校でした。同じ苗字の人ばかりなので、名前を呼び合って行きます。二列に並び、前と後は上級生で中は下級生でした。学校は歩いて四〇～五〇分位、山をひとつ越えた所でした。天気の良い日は山の木々が光って見え、道には草花が咲き、道草をしたくなるような道筋でした。雨の日は大変でした。雨水が川のように流れ、山道は足を滑らせながらの登校でした。骨の曲った傘は、さしても、ささなくても、同じようでズブぬれになりながら学校に着いたら、洋服もズックのランドセルの中もビショビショでした。

下校は同じ方向の村の友達同志で帰ります。まともに道は歩かず、道なき道の藪（やぶ）の中を歩き廻り、山を下れば、桑畑の中を抜け、桑の実を食べながら、口のまわりを赤紫にして、ポケットの中にもつめ込んで帰りました。

学校での勉強や、先生のことは、ほとんど覚えていないのです。当時の先生とは、東京に戻ってから一度だけ、結婚して川崎に住んでいるというので、訪ねて行ったことがあります。物置き納屋のような所を借りて生活していたので、梅雨に入ると、前庭や土間まで水につかって、下駄がプカプカ浮いていました。道路わきには溝があって、きれいな水が流れ

ていました。横庭には、小さな池があり、その水を引き込んでいました。そこでは、米をといだり、野菜や、鍋や釜を洗ったりしていました。飲み水などは、つるべ井戸から水を汲み上げて、大きな瓶に入れるのは大変な仕事でした。祖母が係でした。池にはドジョウやザリガニ等がいました。ドジョウと豆腐のみそ汁を作ると、ドジョウが豆腐の中に首を突っ込んでいるのを見た時は、食べられませんでした。

梅雨が明けると毎日川へ泳ぎに行きました。川を塞き止めて積んである石の上から飛び込んで、五メートル位、流されて顔を水面に出す。こんなことを何回もしているうちにいつの間にか日は暮れてしまいます。薄暗くなるまで遊んだ帰りは、川原にある誰かの畑でトマト、キュウリ、サツマイモを黙って取って食べ、何回も見つかっては、追いかけられた。時々はトマトやキュウリを、パンツの中に隠して、家に持って帰りました。

夏の暑い日、バリバリ言ってよく聞こえないラジオの前で、祖母が涙ぐんでいました。側へとんで行くと、何だかよくわからない言葉と低い声が聞こえました。そして、戦争が終わったことを知らされました。

帰りの汽車のことも、まったく覚えていないのです。九月の新学期は東京で迎えました。あまりつらい事、悲しい事もなかった私は、本当に、幸せだったと思います。ただ、いつも「おなかがすいていた」ような気がします。

以上のような体験をしました。考えて見ると子供だった私は何の苦労もなく、大人になりました。今、思うことは、戦争は二度と起こしてはならない、悲惨なことばかりです。我が子、孫が、戦場に行くようなことは、絶対に反対です。

疎開の思い出

●成田西一丁目
今井　米子
（昭和八年生まれ）

昭和一九年八月、国民学校の五年生だった私は、三十数名のクラスメートとともに東京を後にした。福島県の小さな村の旅館に疎開するためだった。

旅館の二階は襖が取り払われて三部屋続きになっていて、奥にふとん部屋があった。左側は窓に面した長い廊下で道路が見えた。集団生活の物珍しさが先立ち、寂しさはさほど感じなかった。頭を向き合わせて一部屋に一〇人ぐらいずつ寝て、起きるとふとん部屋にふとんを重ね、廊下に置いてある細長い机を並べる。食卓兼勉強机だった。食事は下の台所から小母さんたちが運んできた。盥のようなお櫃にごはんが入っていて、小母さんはどんぶりに次々とごはんをよそった。このごはんは後にじゃが芋入りの雑炊に変わったが……

廊下続きの別棟に女教師と保健婦が、少し離れた一軒家に男教師が家族と住んでいた。その近くのもう一軒の旅館に男子生徒が疎開していた。

九時になるとどちらかの教師が授業に来た。お昼をはさんで午後も二時間勉強した。その後が自由時間である。集団生活をしているといつの間にかリーダーが決まり、遊びもリーダーに従うようになる。私たちはよく源平合戦をして遊んだ。グループを源氏、平家の二つに分け、清盛と義経（これはもちろんリーダー）とそれぞれの奥方を選ぶ。清盛と義経は別の部屋に座蒲団を五枚重ねてモンペ姿であぐらをかき、奥方はその隣に着物姿で正座する。両側に家来がずらっと並び、奥方や家来が大将の言い分を伝える使者になる。清盛の奥方になったK子はなかなか学があり、

「妾が思いますには」

などと言ってきたので義経の私はびっくりして、「苦しゅうない」と苦しい返事をしたものだった。やがて一行は裏山へ行き、木の枝を刀と薙刀にして「えい、やっ」と源平合戦を繰り広げるのだった。

月に一度か二度、村の人たちが慰問に来てくれた。お赤飯のおにぎりやさつま芋のふかしたものなど、私たちはお腹いっぱい食べられる日だった。お礼に学芸会をすることにした。ふとん部屋の前の部屋を舞台に、残りの二部屋を観客席

に当てた。劇、歌、詩吟、踊りと続く学芸会に、子供を混じえた村の人たちは入りきれないくらい集まり、盛大な拍手をしてくれるのだった。

夏は川で泳ぎ、秋は田圃で蝗とり、週に一度は村の学校の音楽室を借り、音楽の授業もあった。学校までの田舎道の長かったのを覚えている。時々は喧嘩もあったが、いつの間にか仲直りして仲良く暮していた。ただ蚤と虱には悩ませられた。あまりひどくなったので蚤取りの時間が設けられた。朝、ふとんをしまうと当番が「蚤取り始め！」の号令をかける。みんなそれぞれヘアピンで畳のへりをほじると蚤がぴょんぴょん飛び出す。それを手で叩いて動けなくし、うまく摑んで両手の親指の爪でつぶすのである。「蚤取りやめ」の号令までみんな夢中で追いかけ廻したものだ。

終戦の日は暑かった。陛下の放送があるからとみんな並ばされてラジオを聞いた。ガアガア言うラジオにむずかしい言葉で何だかよくわからなかった。女教師が泣きながら「日本は戦争に負けたのよ」と言った時、嬉しい、家へ帰れる、と思った。一年もの集団生活に飽きていた。

それからの二か月、いつ帰れるかということばかり考えていた。だからその日が決まった時、みんな歓声をあげて喜んだ。幸い家の焼けた人はいなかった。帰る時にはみんなで歌を歌おうと相談した。そしてその日が来た。

去らばAよ　又来るまでは

歌い出したら涙がとまらなくなった。あんなに待ち焦れた日だったのに、別れが辛くて悲しくて、宿の人たちの顔も村長さんの顔もぼやけてしまった。みんな声にならない歌を歌って「さようなら、さようなら」と泣きながら手を振った。

その翌年私たちは卒業した。何と卒業式に村長さんが来て下さったのだ。思いがけない喜びだった。先生に言われて私は「村長さんをお迎えして」という歓迎文を読んだ。

「有難う、今井さん有難う」

名前を言われて私はびっくりした。疎開中一度も個人的にお話したことなどなかったのに、私の名前を知っていて下さったことに感激した。

あれから四十数年、あの村はどうなっただろう。あの人たちは……。いつかあの村に行って一年二か月暮した子供時代をふり返ってみたいと思っている。

私の戦争体験

●高井戸西一丁目
遠藤　和子
（昭和一〇年生まれ）

昭和一〇年、私は双生児姉妹の一人として深川（現江東区）で生まれた。家の事情で、姉は父母とともに本所菊川町の母の実家へ、私は祖父母に育てられた。隅田川をへだてて浅草があり、その後移った向島寺島町（現墨田区）からも毎日のように連れていってもらったものである。昭和一六年国民学校（現小学校）入学直前に蒲田下丸子町（現大田区）へ移った。同年一二月八日には、第二次世界大戦が始まり、私たちの判からぬままに日本の変化が起こり出していたのだ。蒲田の家は京浜工業地帯の中にあるM会社所属の職業訓練校（青年学校）の用務員室を兼ねた所で、戦況が進むにつれて、男子生徒はいなくなり、いつのまにか女子挺身隊と呼ばれた女子学生が大勢入って来て、軍事的な訓練を受けている様子が良く見られた。スカートではなく、もんぺ姿で白い鉢巻をし薙刀（なぎなた）を習っていた。学校にも軍部から偉い人が来て、私たち子どもにまで長い訓示がされる日々であった。

昭和一九年、戦況は悪化し私たちは親と離れて地方へ疎開することになった。縁故の無い人は学校から集団で行くことになり、私も加わった。本所にいた姉も、千葉の木更津へ行った。私たちは静岡の磐田郡（現磐田市）のお寺へ入った。四年生が何か所かに分かれ、先生と地元から来て下さった幾人かの寮母さんとともに生まれて初めての集団生活が開始されたのであった。最初は、お寺から皆で地元の学校へ通っていたが、浜松航空隊が近いこともあって空襲が激しくなり、とうとうお寺で勉強することになった。爆風のよけ方も習い、毎日のように庭の防空壕に飛び込む日が続いた。この時期に現在騒がれている東海の大地震が起こったのであった。一週間も続いた夜中の余震と空襲警報に、私たちは恐怖心でいっぱいであった。母からも心配して葉書が届いたが、これが最後の形身となってしまうとは……。

昭和二〇年三月一〇日、この日深川から下町方面は大空襲に見舞われ、最大の被害を受けたのであった。四月に入るまで私は何も知らず、母の便りが無いのを心配していた。東京から急に祖母が面会に来て「お母さんと妹弟が行方不明になってしまったよ。」と聴かされ、茫然としてしまった。特別

の許可を得たからと一時帰京することになり、途中警報で汽車が止まったりしながらやっと家についた。父と姉も待っていて、父から焼野原となった下町の様子をきかされた。諦めるより仕方が無かった。一週間の約束でいた私の滞在期間も交通事情の悪化もあってなかなか戻れずにいるうちに、四月一四日～一五日にかけての京浜地区の大空襲にあってしまったのであった。

当時衣服は着たままで寝ていたが、父たちに起こされ飛び出した時、外は敵の落とした照明弾で真昼のような明るさだった。爆風により火の手が上がり夢中で外の防空壕へ飛び込んだ。壕の屋根が燃え出したので皆外へ逃げ出したが、一面火の海でどちらへ行ったら良いのか判からない有様だった。とに角多摩川へと走り出したが、火の粉は落ち、建物は燃えさかっている中を、親にはぐれぬようについて行くのが勢いっぱいであった。火によって起こった強風で声も聴こえぬようで、呼び合いながら堤防を越えようとした瞬間、敵機が急降下して来た。相手の顔が見えたと思った時、私たちに機銃掃射を浴びせかけた。夢中で土手をすべり下り、川原に掘られたタコ穴へ飛び込んだが、数少ないため父たちは入れず、私たちが外へ出ないようフタを探して一生懸命押えていたのであった。死ぬならば、ここで皆一緒と思っていたそうである。やっと敵機が去りホッとして見た周囲の様子は、忘れられるものではない。

向こう岸へ行こうと乗った舟の荷物に火がついて燃えさかり、人々は疲れ切って真赤な川の面を見つめていた。堤防に上って目に入った光景は、軍需工場の燃えさかる炎の中で何台かの戦車が動き出し、強風の音とともにゴウゴウとぶつかり合っているすさまじいものであった。時間は全く判らなかった。唯一頼りにしていた同じ町の親戚の家を目指して火をくぐりぬけて行った。幸運にもたった道路一つの差で被災していなかった。家に着いたとたんに身体が震え出し、一週間も思い出す度に歯の根が合わぬ状態が続いた。

私は静岡へ戻らなければならなかった。転校した姉とともに父に連れられ先生や友だちの所にたどりつき、東京の様子を話したが、誰も信じようとはしなかった。その後は静岡も空襲が多くなり、私たちは親しんだ地元の人たちと別れて秋田県へ再疎開することになったのである。途中品川駅では夜明け近くなのに親たちが最後の別れ（当時は本当にそのような気持ちであった）を告げようと涙ながらに待ちわびていた。秋田へ行ってから八月一五日の玉音放送を聴くまでは、警報一つ鳴らず自然の中でいろいろな体験が出来た。冬が来る前にとの親たちの請願が実って帰京することになり、何人かずつ村の家庭に分宿させて頂いた想い出もある。長旅の末、蒲田駅に着きホームに降りた時、皆の驚きは激しかった。駅以外何も無い焼け野原が見渡せたからであった。

とに角、その日から私たちの戦後が始まり、現在まで四〇年余り、数々の事があり当時をともに過した祖父母、父もこの世に存在しない。娘や息子も成長し、次の時代に移ろうとしている。絶対に私たちの悲しみを味わわせたくは無い。平和な国づくりの中に、強い精神力を育ててほしいものである。

私の学童集団疎開

●下高井戸一丁目
岡井　洋人
（昭和八年生まれ）

昭和一九年八月、城東区（現江東区）立第二亀戸国民学校の一〇〇名近い児童たちは、前日夕闇迫る校庭で母姉の見送りを受け、上野駅から夜汽車に乗り、翌朝目的地の山形県上山町（現上山市）に着いた。当時の子供としてはかなりの長旅と未知の土地へ行く不安とが混じり合い、ほとんど眠る事も出来ず、駅前広場に整列した時は疲れた身体に朝の太陽はまぶしく、北国とはいえ八月の日ざしは相当に強かった。

広場では東京出発時と同じような儀式があり、地元代表のスピーチがあったように思う。

駅から徒歩で一〇分程の所に自分たちの住家となるM旅館があった。いよいよ集団疎開生活の始まりである。旅館に着き全員一〇〇畳近い広間に通され、その広さにおどろいた。今までこんなに広い部屋を見たことも入ったこともなかったからだ。最初の一週間程はお客あつかいで、全員その広間で寝起きした—男女別々の疎開生活だったのか女生徒の記憶は全くない—間もなく各学年（集団疎開は三年生以上）ごとに部屋を与えられ、我々六年生は二階の三〇畳と二〇畳程の部屋に入った。六年生全員で三〇人程いたであろうか、廊下の特製の棚にそれぞれ自分の場所を決め、そこに身辺の物品を置いた。寝具は部屋の隅に重ね、広くも狭くもない部屋での生活が始まった。

九月に入り二学期が始まると、我々疎開学童も地元の小学校へ通い、空いた教室を借りてかあるいは地元生徒と午前午後と交代してか一日何時間かの授業をした。また、祝日の式典、秋の運動会は地元の生徒と一緒にしたことなどが鮮明に頭に残っている。その間我々は先生に引率されて、落穂拾いやイナゴ取りに何回か出かけた。こんなある日、空腹といたずら気分とで何人かの生徒が農家の柿を取って食べたといって、全員旅館の会議室に集められ教頭からずい分と説教された。これをたまたま廊下で見聞きしていた旅館のおかみが「男の子が柿の一つや二つ取ってたべてもそんなに叱る事はない」と言って我々をかばってくれた時のうれしかった事をよく覚えている。秋の早い東北の朝夕はかなり寒くなっても、早朝全員が素肌で乾布摩擦をし、近くの川までマラソンをし

たものである。また、自由時間には近くの丘へ登り、眼下に東京方面へ行く奥羽線の汽車を眺め、ひそかに涙を流したのもこのころである。「夜逃げの唄」などと言うかえ唄が歌われたのもこんな時期であった。

北国の秋は短く山々が白くなりはじめた一一月、我々と同じ棟の三階へ宿泊に来ていた一人の若い海軍の軍人に会った。彼は我々小学生と当時の軍歌を何曲か歌い終わって「明日は出発だ」と言い残して我々の前から去って行った姿が今も目に浮かぶ。当時我々の旅館で目に入る人間といえば、少数の女性従業員以外すべて小学生だったので奇異に感じられた。

一二月に入ると平野にも雪が積もり、雪道用の履物のない我々は学校も行けず自然休校、旅館の一室で六年生の進学(旧制中学へ)希望者に対し長い食台を並べて授業のまねごとらしきものが時々行われた。地元の子供のように雪上を滑る道具を持っていない我々は、竹を半分に割り下駄のはなおをつけ、それを履いて滑った。竹下駄と呼び、当時雪国における唯一の遊びであった。そんな時金持ちの親が東京からスキーを持って来て、子供と一緒に近くの山へ滑りに行くという、当時としては大変めずらしい事もあった。

暮も正月もなくその年が終わり、昭和二〇年が来る(正月は雑煮を食べたように思う)。食事は日毎に悪化し、雑炊が多くなる。外は一面の雪で外出も出来ず、終日部屋の中でわいわい、がやがや、寮母によく叱られたものである。そんな暗い二か月間の終わりのころ、卒業のため三月に帰京する我々六年生のために、地元の好意で二人一組となり民家に一泊させてもらうことが出来た。私たち二人は駅近くのそば屋へ行く事に決まった。寒い時期の熱い煮込みうどん、半年ぶりのこたつにあたりながらの手作りのぼたもちを腹一杯食べた味とその時の嬉しさは忘れることが出来ない。一泊して旅館に帰った我々は、自分が訪問した家でどんなもてなしを受けたか自慢し合ったものである。

三月三日いよいよ卒業のために帰京、待ちに待った夢にまで見た帰京である。旅館を出発する時兄弟で疎開していた者は弟たちと別れなくてはならない。泣きながら見送っている小さい小学生がかわいそうだった。

その日の夕方、今のJR総武線亀戸駅到着、大勢の出迎えの人だったが、にっこり笑った母の顔はすぐに分かった。やがて、六日後の三月九日、この駅前が真黒く焼けた死体の山になろうとは、出迎えの人、我々帰京した者を含めて誰が想像したであろうか。そしてその中の一人によもや自分自身がなろうとは……。

このようにして私の集団疎開は終わり、同時に学校も全滅、当時の区役所発行のわら半紙八分の一の卒業証明書が一枚あるだけで、いまだに卒業式もなく、当時の恩師・学友には今日まで誰一人とも会っていないのである。